

児玉知之 著

戦略としての医療面接術

—こうすればコミュニケーション能力は確実に向上する

新城名保美（元住吉腎クリニック院長）

『戦略としての医療面接術』のタイトル通り、医療面接の著作です。しかしながら、従来の「医療面接」をテーマに扱った書籍とは異なり、著者自身の実際の経験に基づき深く洞察されており、通読してなるほど、そういう切り口もあったか、と深く感心しました。われわれが普段の臨床で対応する「患者・その家族」—その個性や社会環境などの背景要素の多様性に注目しています。

「うまくいかない医療面接」を経験した際、医師としては、「あの患者・患者家族は変だから…」と自分を含め他の医療スタッフに説明付けようとしがちですが、うまくいかなかった医療面接は、われわれが医療面接上必ず確認しておかなければならなかった手順や態度を怠ったことが原因であったかもしれない。この著作はそれを実臨床で陥りがちな、さまざまなシチュエーションを提示することで、抽象論に終始することなく具体的に提示してくれています。通読後、今まで自分が経験してきた医療面接の失敗例を思い返しても、本書にて指摘されている「やってはいけないこと」がいくつも当てはまり、内省した次第です。

また、道德、倫理、宗教、信仰、文化などと密接に関連する医療面接という分野を、「戦略としての」という枕言葉通り、どうすればスキルとして扱えるようになるのか、論じています。どのように医師が「名医」を演じれば、病院という舞台に参加した患者様の立場からみて、良心的で信頼でき得るかということも詳細に記載されています。とてもユニークな特長です。そして、それらを説得力をもって裏付けるように、さまざまな医療面接上のエビデンスが盛り込まれていて、決して著者の独りよがりの視点に終始していないことも好感がもてました。

この著作で提示されているスキルをもって患者様と接すれば、臨床医としての、いえ一人の魅力ある人間としてのコミュニケーション能力も一段階上のステージに上げることができるのではないのでしょうか。『戦略としての医療面接術』は、医師として最初の一步を踏み出した研修医のみならず、中堅、ベテランの医師にもお勧めしたい良書であると思います。（A5・頁 272 2015 年 11 月 定価本体 3,500 円＋税 [ISBN978-4-260-02162-3] 医学書院刊）



1,076 人中、合格者 23 人
手話通訳士試験で過去最低

聴力障害者情報文化センターは 1 月 29 日、第 27 回手話通訳技能認定試験（手話通訳士試験）の合格者を発表した。受験者 1,076 人中、合格者は 23 人（合格率 2.1%）で、合格者数、合格率とも過去最低となった。

合格者は女性 22 人（95.7%）、男性 1 人（4.3%）。平均年齢は 43.3 歳だった。

この試験の合格者（率）は最高が第 21 回の 311 人（33.4%）、最低が第 13 回の 40 人（4.4%）で、ここ

5 年は 105～184 人（11.1～21.3%）の間で推移していた。

合格者（率）が過去最低だったことについて、同試験を所管する厚生労働省障害保健福祉部企画課自立支援振興室は「試験内容は一定の水準を保っており、難易度は変わっていない。今回は手話通訳経験が長い受験者が少なかったこともあり、合格レベルに達しない人が多かった」と話している。

（福祉新聞・第 2750 号 2016 年 2 月 8 日）